

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

生徒が、修学旅行や職場体験学習の取組を発表し合うことで、互いに認め合ったり、評価し合ったりする機会を設定している。そして、生徒がこれまでの準備期間(合唱練習、係活動、役割など)でどれだけ頑張ってきたかを視覚的に振り返り、その努力を集団全体で認め合う機会を設定している。



また、長期休業明けには、生活アンケートの記入内容から、長期休業明けの学校生活に不安を感じている生徒を把握し、個別に面談を実施している。

校内支援委員会にはS S Wや教育支援室指導員が参加し、多角的な情報共有と組織的支援で全ての生徒の居場所を確保している。

校内別室については、相談機能と学習機能をより充実させるために、校内支援委員会において、絶えず検討を行っている。

【取組2】(A中学校)

学校行事前に生徒が自主的にメッセージカードを交換し、感謝や励まし合いを通じてクラスの連帯感と絆を深めている。

また、生徒会役員が募った有志が共に校舎を清掃し、学校への貢献意識と連帯感を築いている。



さらに、新入生歓迎会では、生徒会が主体的に部活動紹介を企画・運営し、新入生を迎え入れることで、部員相互の連帯感と学校への帰属意識を高めている。

【取組3】(B中学校)

授業において、共感的な人間関係を育むため、傾聴を促し、生徒が間違いを恐れず発言できるように勇気付けた。

また、ICT活用による調べ学習や個人思考の時間を十分確保し、自己決定の場を提供した。自己存在感を高めるため、全員が参加可能な発問・助言を工夫し、小さな発言でも積極的に取り上げることで、全ての生徒の主体的な学びを促した。

【取組4】(B中学校)

個々の不登校生徒に対し、校内別室対応や家庭連絡、放課後登校、オンライン授業などの支援を強化し、保護者への対応も充実させた。

また、新たな不登校を生まないため、校内研修では、不登校の未然防止や早期対応、S C・S S Wや関係機関との連携等について取り上げ、教員の意識の向上を図った。

さらに、全教員に対し、毎週の校内委員会での検討内容を周知し、具体的な支援内容について組織的に取り組めるよう徹底を図った。

多様な学びの場を確保する取組

(「早期支援」及び「長期化への対応」の取組)の推進

支援会議 (C中学校)

毎週月曜日の4校時に、特別支援教育チームコーディネーターが司会となり開催している。参加者は各学年コーディネーター、生活指導主任、特別支援教室専門員、SC、SSW、管理職など様々な専門性をもつ職員で構成され、具体的な支援策を多角的な意見を踏まえて提案している。

アウトリーチによる支援 (C中学校)

不登校の生徒に対し、学校での校内別室登校を促すことを基本とし、困難な場合は、校門までの登校、又は担任による定期的な家庭訪問を実施している。生徒との接触が難しい場合は、SSWと連携して家庭訪問を実施し、段階的に学校との接点と社会とのつながりの構築を図っている。

校内別室における支援 (D中学校)

コミュニケーション能力の向上と個別の学習支援を重点的に実施した。生徒の意欲を尊重し、学習課題や時間設定を自己決定できるように支援した上で、支援員による学習補助を行った。さらに、校内別室登校時には担任が積極的に訪問し、給食を共に食べるなど関わりを維持することで、安心感をもてるような支援を継続した。



デジタル機器を活用した支援 (E中学校)

実技教科を含むリモート授業を展開した。教室と同じように取り組める環境を整備し、授業風景や板書、細かな手元の様子をリアルタイムで配信することで、別室の生徒も教室にいるのと同様に参加できるように工夫した。



関係機関との連携 (E中学校)

教育相談と連携し、生徒・保護者との関係づくりや支援方法、発達検査等の結果を確認し、指導に活用した。

SC (週1回)・SSW (月1回)の来校に合わせ、特別支援教室専門員を加えたケース会議を定期的実施し、専門的な情報交換を通じて、日々の指導に役立てた。

成果

居場所づくりやきずなづくりを推進したことが、生徒の帰属意識の向上につながった。組織的な連携体制を確立し、多様な学びの場を確保することができた。

課題

校内別室について、生徒のニーズに合わせ継続的な改善検討が必要である。また、ICTを活用した個別支援の拡充が課題である。